



筑摩世界文學大系

26

ドイツ・ロマン派集

手塚富雄 山下 肇
生野幸吉 川村二郎 訳
中野孝次 舟木重信
井上正蔵



ヒュペーリオン ヴーツ先生万歳
夜の讃歌 キリスト教世界またはヨーロッパ
のらくら者 金の壺 ハルツ紀行
ヘルグラント便り フローレンス夜話
アッタ・トロル ドイツ 冬物語

筑摩書房

筑摩世界文學大系 26

昭和四十九年十月十五日
昭和五十四年十一月三十日

初版第一刷発行
初版第四刷発行

ドイツ・ロマン派集

訳者代表

手塚 富雄
井上 正蔵

発行者

関根 栄郷

東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所

筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一

電話東京(〇三)

二九一―七六五二(営業部)

二九四―六七一一(編集部)

振替口座東京六一四二二三三

印刷 三見印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20626 (出版社) 4604

Printed in Japan

目次

ヒュペーリオン	手塚富雄	5
ヴーツ先生万歳	ジャン・パウ 山下 肇	99
夜の讃歌	ノヴァーリス 生野 幸吉	130
キリスト教世界または ヨーロツパ	ノヴァーリス 生野 幸吉	137
のらくら者	アイヒェンドルフ 川村二郎	148
金の壺	ホフマ 中野 孝次	199
ハルツ紀行	ハ木重信	253
ヘルゴラント便り	ハ上正蔵	290
フローレンス夜話	ハ上正蔵	304
アツタ・トロル	ハ上正蔵	339
ドイツ 冬物語	ハ上正蔵	376

文学及び音楽における
ドイツ・ロマン派

ハイネ始末記

解説

ドイツ・ロマン派年表

生シュ
野タイ
幸イ
吉ガ
訳ル

カール・クラウス
池内紀訳

井手上塚
正富
蔵雄

450 436 424 411

ドイツ・ロマン派集

ヒュペーリオン

または
ギリシャの隠者ヘルダーリン
手塚富雄訳

第一部

序

最大のものにも屈服されることなく、最小のものにも喜びを見いだす。それは神聖なことである。

わたしは、できるならこの書物にドイツ人の愛がそそがれることを期待したい。しかしわたしが懼れるのは、ある人々がこれを綱要書のよう(ぎよう)に読んで、それに含まれた思想的内容にあまりに意を注ぎすぎることであり、またそれと反対にある人々が、これをあまりに興味本位に軽

く取りすぎることである。その両者ともに、本書を理解したものではないのである。

わたしのさしだすこの花の、ただ匂いを嗅ぐうとする人は、その花を知る人ではない。また、それを摘んで、ただそこから知識をえようとする人も、それを知る人ではない。

もろもろの不協和音が一人の人物のうちに融和し解消することは、単なる思索のための物語でもなく、また空虚な娯楽のための物語でもない。

次のことが行なわれる舞台は新しくはない。そして告白するならば、わたしは幼稚にもこの点についてこの物語に変更を試みようとしたこともあった。しかしわたしはいま確信している、この舞台はヒュペーリオンの悲歌的な性格にとつて唯一の適した場所であると、そして読者の判断をあらかじめ推測して、そんなにまで譲歩的になった自分を恥じたのであった。

残念なのは、今のところ全容についての批判を何人もまだなしえないことである。しかし、第二巻はできるだけ早く続刊の運びにしたい。

第一の巻

ヒュペーリオンからベラルミンへ

愛する祖国の地は、わたしにふたたび喜びと

悩みをあたえてくれる。

わたしは今、毎朝コリントの海峡の高みに足をはこぶ。そして、花のあいだを飛ぶ蜜蜂のように、わたしの魂は、たびたび海面をあちこちと飛ぶ。わたしの立つ陽に燃える山々は、右から、左から、その裾をすずしく海に洗われているのだ。

ことにこの二つの入海の一つが、わたしを喜ばしてくれたであろう、もしわたしが千年前にここに立ったのであったなら。

勝利にかがやく半神のように、壮麗なヘリコンの原野と、雪の峰々を朝日に赤く染められたバルナスの山と、そして楽園に似たジキオンの平地とのあいだを、そのかがやく入海は、歡喜の都市、青年のようなコリントに向かって、波濤を立ててすすんできた。そして世界のあらゆる地帯からかち得た富を、愛するこの青春の都市の前に撒きちらしたのだ。

しかし、このように過去をしのんでも、何になろう。古代の石の廢墟のあいだにただけしい挽歌をうたっている豺の叫びが、わたしの夢をおどろかして、わたしを現実へ投げ出すのだ。

花咲き榮える祖国を心のよるこびとはげましにしている人は、幸いだ。わたしは、ひとから自分の祖国をたずねられるとき、沼のなかへ投げこまれる思いがする、自分がよこたわっている上に棺の蓋を打ちつけられる思いがする。そして、わたしがギリシャ人だといわれるとき、わたしはいつも、犬の頸輪で喉をしめつけられ

るような苦痛を受ける。

けれども、わがベラルミンよ。ときとしてこのような言葉がわたしの口から洩れ、さらには怒りの思いにひと粒の涙がわたしの眼に浮かんだとき、きみたちドイツ人のあいだによく見うけられる賢明な人たちは、わたしの悩める心を好餌として、これらの箴言の数々をわたしに吹きこみ、わたしに次のように教えることによつて自分たちの喜びとした。「嘆いてはいけません。行為せよ」と。

ああ、わたしは行為しなければよかったのだ。それならわたしは現在、どれほどもっと幸福だったろう。どれほど今より希望に富んでいたことだろう。

そうだ、人間どうしのこととは忘れてしまふのがいいのだ。さまざまの苦しみと憤懣をかさねて飢え求めている心よ、そして帰って行くのがいいのだ、おまえのいで立ったところへ。自然の腕のなかへ、うつろわぬ静かな美しいこの母のふところのなかへ。

ヒューベリオンからベラルミンへ

わたしは、これが自分のものだと言ひうるものを、何ひとつもっていない。

わたしの愛する人たちは、遠くに離れ、またこの世にない。その人たちのことを伝えてくれる声は、どこからも聞こえない。

この世のわたしの事業は終わった。わたしは

意欲に充ちて仕事におもむいた、その仕事のために血を流した。そして世界を一文も富ませはしなかった。

名もなく友もなくわたしは帰つて来て、墓地のように声のないわたしの祖国をさまよう。そしてわたしを待つのは、おそらく猟人の刃であろう。ああ、われわれギリシヤ人は、まるで森の野獣のように、そのなぐさみものとなるだけなのだ。

けれど、天上の日よ、おんみはまだかがやいている。聖なる大地よ、おんみはまだ緑にしている。いまも河流はゆたかに海にそそぎ入り、日影をつくる樹々は真昼にそよいでいる。春の歓喜の歌は、わたしの地上の思いを寝入らしてくる。生気に充ちた世界の充実は、窮乏になやむわたしを、陶酔をもつて養い、満ち足らわしてくる。

おお、恵み深い自然よ。おんみの美しさのまえに眼をあげるとき、わたしはわたしの心のさまを自分でもいうことができない。しかし天上のすべての喜悅は、わたしがおんみを前にして、愛するひとを前にしてのように流す涙のなかに宿っているのだ。

やさしい風のそよぎがわたしの胸にまつわるとき、わたしの存在のすべては、声をひそめて耳をかたむける。遠い紺碧に心を奪われて、わたしは、あるいは空のエーテルを仰ぎ、あるいは聖なる海に目をそそぐ。するとわたしには、さながら、わたしに近しい霊が双の腕を開いて

わたしを迎えてくれるように、孤独の悲しみが神性に充ちた生の中へ融け入ってしまうように、思われるのだ。

万有とひとつになること、それが神性に充ちた生である。それが人間の至境である。

生きとし生けるすべてのものと一つになること、自己を忘れて至福のうちに自然のいっさいの中へ帰ってゆくこと、それは人の思いと喜びとの頂点である。聖なる山頂、永遠のやすらぎの場所である。そこでは真昼も暑さを失い、雷も声をおさめ、湧き立つ海も麦畑の穂波にひとしくなるのである。

生きとし生けるすべてのものと一つになる！この言葉と共に、道徳はその峻厳な装いを、人間の知性はその王笏を、捨てる。そして、ありとあらゆる思いは、永遠に一なる世界のすがたに向き合つて消えてゆく。それはちょうど苦闘する芸術家の信奉していた諸規則が靈感の光をあびて消え去るようなものだ。そして運命の鉄の支配も、その主権を断念する。そして万物の結合によつて死は消え、不可分の統一と永遠の青春が、世界を幸福にし、世界を美しくするのだ。

そういう高みにわたしはしばしば立つのだ、ベラルミンよ。しかし、一瞬意識がもどると、わたしは下界へ投げ落とされる。分別の世界に帰ると、わたしは元のままのわたしで、孤独であり、現世のあらゆる苦しみを負っている。そしてわたしの心の避難所である永遠にして一な

る世界は去つてしまふ。自然は開いた腕をとぎし、わたしは異邦の者のようにその前に立ち、もはや自然を理解しない。

ああ、わたしはきみたちの学校で学ばなければよかったのだ。わたしは知識の深い谷間に下つて行つて、年少者の愚かさから、わたしの純粹な喜びの確かな保証がそこにあると期待していた。その知識がわたしのものついつさいをそこねてしまったのだ。

わたしはきみたちのところで学んで、理性的になつた。わたしとわたしを取り巻くものとを区別することを、徹底的に学んだ。その結果は、わたしはいまこの美しい世界のなかで孤立している。わたしがすこやかに育つた自然の園からこのようにそとへ投げ出され、真昼の太陽のものとでしぼんでいる。

ああ、人間は、夢見るとき、神のひとりであり、考えるとき、乞食である。感激がなくなれば、人間は、父親に家から追い出された放蕩息子にひとしい。そして父親がはなむけに足もとに投げあてたわずかの銅銭を見つめているだけなのだ。

ヒュペリオンからベラルミンへ

わたしの生の行路を語れというきみの言葉はありがたい。きみはわたしに過ぎた日の思い出を呼び起こしてくれるのだ。

それに、わたしがギリシヤに帰つて来たのも、

幼い日のたわむれに近づいて暮らしたい気持ちからだつたのだ。

働く者が、生気をよみがえらしてくれる眠りに憩いを求めるように、苦悶に疲れたわたしは、あどけない過去の日の腕のなかに身をしずめるのだ。

幼いころの安らかさよ、天上の安らかさよ。幾度わたしはおまえの前に足をとめ、おまえをつくづくと眺め、おまえを偲ぼうとしたことだらう。しかし、以前悪かつたのが今修復されているものなら、われわれも考えることができるが、至福のあり方が去つて永久にもどらない幼時とその無邪気さは、もう心に描くことさえできないのだ。

まだ物静かな幼児であつて、周囲のことは何ひとつ知らなかつたとき、わたしは今のようなわたしではなかつた。いまのわたしは、心情のあらゆる労苦を重ねて、思い疲れ、戦い疲れているだけだ。

そうだ、幼児はさながら神である。人間たちのカメレオンの色に染められぬかぎりは。

幼児は、まったくあるがままの存在である。だから幼児はあれほど美しい。

掟と運命の強制は、幼児に触れることができない。幼児には、ただ自由だけがある。

幼児には平和がある。まだ自分自身との分裂と不和を知らないからだ。富は幼児にある。幼児の知っているのは、自分の心だけである。生の不如意は知らない。幼児は不死である。死に

ついては何も知らないから。

けれども人間たちは、それを許しておこうとはしない。この神のような存在も、人間たちの一人となつて、その仲間入りをしなければならぬのだ。この世には人間たちもいるということを知らねばならないのだ。そして自然が幼児を楽園から追放する前に、人間たちが甘言と力ずくで、幼児を呪いの野に曳きずり出してしまふ。そして幼児は人間たちと同じように、額に汗して身をすり減らすようになるのである。

しかし、目覚めのときも美しいものだ、機の熱さないうちにわれわれが揺り起こされることがないならば。

ああ、それは聖なるときだ。そのときわれわれの心は初めておのが翼の力をためし、火のような生長力に充ちて壮麗な世界のなかに立つのだ。それは若木が朝の日に向かつて自分を開き、そのたくさんの小さい腕を無限の空にさし延べる姿だ。

そのころ、わたしはどんなに山々を、また海のほとりを歩きめぐつたことだらう。ああ、幾度わたしは胸をどろかせて、ティナーの島の山上に立ち、鷹や鶴、また水平線のかたに消えてゆく敢為な快活な船を見送つたことだらう。あのかたへ、とわたしは思った。かたへおまえもいつかは乗り出してゆくのだ。そして、わたしは、憧れに燃えたつあまりに、冷たい水浴場に飛び込んで、泡立つ水を額にそそぐ者と同じ気持ちに駆られたのだ。

嘆息しながら、それからわたしは家路につく。この学びの時期さえ過ぎたなら、とわたしは幾度も考えた。

無邪気な若者の心よ。学びの時期は、いまままだなかなか終えるところではないのだ。

若いときには人間は、目的地がすぐまぢかにあるように思うのだ。それは自然がわたしたちの弱点の補いとして、わたしたちに与えてくれる惑わしのうちのもっとも美しいものである。

そして、わたしがよく花のあいだに坐つて、やさしい春の光を浴び、あたたかい大地をつつむ晴れやかな青空に見入っているとき、またすべてをよみがえらす雨ののちに、山ふところの榆や柳の蔭に憩うているとき、そして木々の枝は天空と触れ合つたことでまだ揺れており、零している森の上には金いろの雲が動いているとき、あるいはまた宵の明星が、昔ながらの天空の若い英雄たちをひきいて、平和のいぶきに充ちて昇つて来、それら星辰のうちにある生命がどんなに苦でない永遠の秩序をなしてエーテルのなかに動きつづけているかをわたしが見るとき、そして世界の安らぎにつつまれて、わたしが喜びのあまり、われ知らず目と耳をそばだてるとき、そのとき、わたしは小声で「あなたはわたしを愛してくださいますか、天上の父よ」とたずねたのであった。そして肯い^{えい}の答えを、しっかりと、心うれしく、この胸に感じたのである。

おお、さながら星空のうちにいますかのように

にわたしが呼びかけたあなたよ、わたしが天地の創造者と呼び、わたしの幼いころの偶像神であったあなたよ、あなたは、わたしがその後あなたを忘れたことを、怒りはしないであろう。——この世界は、この世界の外に別の創造者を求めなければならないほどに、乏しいものであるだろうか。

（原注 このような言葉が、人間心情の一現象として、正当性をとがめられるべきものでないことは、いままさら言う必要もあるまい。）

この美しい自然が一人の父の娘であるならば、その娘のころは父のころではないであろうか。娘の内奥、それはすなわち父ではなからうか。けれど、わたしはほんとうにその自然のころを確保しているだろうか。それを知っているだろうか。

わたしには、それが見えるような気のこととがある。けれどその次の瞬間には、わたしは、わたしの見たものはわたし自身の姿ではないかという思いに愕然とするのだ。わたしは世界の精気を感じるように思うことがある。しかし目がさめて考えてみると、わたしは自分の指を捉えていただけであるように思われるのだ。

ヒュペリオンからベラルミンへ

きみは、プラトーンとその友ステラが、どんなに愛しあったかを知っているか。

それと同じように、わたしは愛した、愛され

た。おお、わたしは幸福な少年だった。等しい者どうしが友となるのは、楽しいことだ。しかし、偉大な人物が小さな者たちを育てて引き上げるのは、この世ならぬ崇高なことである。

果敢な男子の胸から湧いて出る親愛の言葉、精神のきびしい美しさを秘めている微笑、それはわずかなことであつて、しかもゆたかである。それは、ちょうど生と死を単純なシラブルの中に蔵している魔法の呪文、山々のふところから湧き出て、大地の神秘な力を水晶のような滴によつてわれわれにつたえる靈妙な水に似ている。それに反してわたしのもつとも憎むのは、心情をもつていないために、自分は賢いとうぬほれている野蛮人どもである。理に合わぬ区々たるしつけによつて青春の美をさんざんに殺し、そこねてしまふ粗暴な怪物たちである。

まことに、ふくらうが若い驚た^{おどろ}ちを巢から驅り立てて、太陽へ至る道を教えようとする世の中なのだ。

わたしのアダムスよ。あなたを思い出そうとして、ふくらうのことなどを言いだしたことを宥^{なだ}してほしい。すぐれたものを思い浮かべようとなれば、かならずその反対の畸形物も頭に浮かんでくるのは、われわれが経験から知っていることだ。

わが愛する悲しみの半神よ。あなたが、あなたのすべての精神的近親者たちと共に、永久にわたしの目の前にいてくれたなら、どんなにか

嬉しいことだろう。戦う人よ、あなたの平静と力とに接する者、あなたの愛と英知に触れる者は、逃げ出すか、あなたのような人物になるかのどちらかだ。卑小な弱々しい者は、あなたのそばにすることに堪えられないのだ。

あなたがわたしとが遠くに距たつてからずいぶん時はたったが、どんなにしばしばあなたはわたしに近づき、あなたの光でわたしを充たし、わたしをあたたためてくれたことだろう。そしてわたしの凝固した心も、凍てついた泉に日の光が触れるときのように、いきいきとまた動きはじめるのであった。そのときわたしはわたしの幸福を抱いて星の世界へまで翔け昇って行きたかった。その幸福がわたしの周囲の世界によって汚されないために。

わたしは、支えないぶどうの樹のように生い立った。そしてその蔓はあてもなくあちこちに地上をはった。きみもよく知つているとおり、わが国では、気高い力をもったじつに多くの人々が、ただその力を有効に用いる機会がないために、滅びてゆくのだ。わたしは一個の鬼火のようにあちこちとさまよい、あらゆるものに手を出し、あらゆるものに捉えられた。しかしそれも一瞬のことで、目当てのない努力は、いたずらに疲れ果てるばかりだった。どこへ行っても、何をしても、充足が恵まれないことを、わたしは感じていた。しかしわたしはわたしの目標を見つけることはできなかった。そういうときに、わたしは彼に会つたのだ。

彼は、いわゆる文明世界を彼の仕事の素材として、ずいぶん長いあいだそれに忍耐と技術とをささげた。しかしその素材は、血の通わぬ石にすぎなかった。なるほど一時しのぎに外面だけは気高い人間の形をとることはあった。しかしわがアダムスにとつては、そんなものは問題とするに足りなかった。彼の望望したのは人間そのものである。しかし、人間を創るには、彼は自分の技術はあまりに貧しいことを感じていた。彼の求めるような人間たちは、昔は存在していたのだ。そういう人間を現在創り出すためには、自分の技術はあまりに貧しい、それを彼ははつきりと認識した。そういう人間がむかし存在していた土地はどこか、それも彼は知っていた。その国へ彼は行つて、廃墟のもとに、それらの人間を生んだ根原の力をたずね、それを友としておのが孤独の日々の慰めとしようとした。彼はギリシャに came。こうしてわたしは彼に出逢つたのだ。

いまなおわたしは、ほほえみながらわたしを見て近づいて来る彼の姿が目に見える。いまなおわたしは彼の挨拶と彼の問いの数々を耳に聞く。

草木の平和な姿は人間の努力してやまない精神を和らげ、飾りのない満足の感情を魂によみがえらせてくれるものであるが、そういう植物の前に立つように、彼はわたしの前に立った。しかも、そのわたしは、彼のものの静かな精神の充実の、こだまだったのではなかったか。彼と

いうものの奏でる旋律が、わたしの中にくりかえされたのではなかったか。わたしは、わたしの見たものになったのだ。そしてわたしの見たものは、神のように崇高なものであったのだ。人間がどんなに熱意をもつて努めようとも、渾然とした靈感の全能にくらべれば、なんと無力なものであろう。

その靈感は、事の表面にはとどまっていな。われわれをあれこれと部分的に捉えることがない。われわれを捉えるのに、時間も手段もいらない。命令や強制や説得を、それは必要としない。それは、われわれのあらゆる側面、あらゆる深み、あらゆる高みにわたつて、一瞬のうちにわれわれをつかむ。そして、われわれがそれに向き合つて、何事がわれわれに起こつたのかと尋ねるひまもなく、われわれをすっかり美と至福の存在に変えてしまうのだ。

こういうふうに、ごく若いときから、気高い人物に会うことのできたものは、仕合せである。ああ、それは忘れがたい金の日々だった、愛とたのしいそして喜びにあふれた日々だった。

アダムスは、あるいはブルタルコス英雄の世界へ、あるいはギリシャの神々の至福の領土へ、わたしを案内してくれた。あるいは数と尺度の知識をさずけて、青春の血気をしずめ、あるいはわたしを連れて山に登った。そしてわたしたちは昼は、野や森の花、岩々の苔をながめ、夜は天空の星を仰いで、それを人間的な理解の

しかたで理解しようとしてとめたのだ。

このようにして、われわれの内面が素材に触れて力をまし、自分と友のそれぞれの本質を悟り、それによって結びつきを固くし、そしてわれわれの精神がしだいに戦う力をかちえてくるのは、貴重な快感である。

けれどもわたしが三倍も強く、彼と自分自身の心を感じたのは、われわれ二人が過去の時代の亡霊のように、誇りと喜び、怒りと悲しみをたたえて、アトスの山に登り、そこからヘレスポントに渡り、さらに下ってロドスの岸やテナルムの峡谷へと、静かな島々を縫って船を走らせたときである。またさらに憧れに駆られて海岸から、古いペロポネスの陰鬱な奥地へ、またオイロタス河のさびしい岸へ、さらには、ああエリスやネメアやオリムピアの人影もない谷へと進んだときである。そこでわれわれは人々から忘れられてしまったユピテル神の神殿の柱にもたれ、月桂樹やばらや蔓日草（つるひくさ）に取りかこまれて、荒涼とした河床に見入った。すると春の生命と永遠に若い太陽は、かつては人間の名に価するものたちもここにいたのだが、今は去って影もないこと、人間の美しい性質がいまはほとんど残っていないことは、神殿の廢墟や記憶のなかの死者の面影にも及ばないことを、われわれに思い出させてくれたのであった。そういうときわたしは悲しみながら彼のほとりにいて、あれこれのたわむれに時をすごした。半神の像の台石から苔を摘みとり、瓦礫の中から大理石

像の英雄の肩を掘りおこし、茨や雑草をなかば埋もれた台輪から切り取ったりしていた。一方アダマスは、なごやかに廢墟をつつんでいる風景——小麦畑の丘、橄欖樹の木立ち、山の岩間を下りてくる羊の群れ、絶頂から谷へとつづく楡の森を写生していた。そのときカゲはわたしたちの足もとにあそび、アプは真昼の静かきのなかにわたしたちをめぐって羽音をたてていた。——愛するベラルミンよ、できることならわたしはネストルのようにこまごまときみに語りたい。わたしはいま、收穫のすんだ刈り中のあいだを歩む落ち穂拾いのように、過去の株をあゆんでいる。そういうときにはだれしも麦藁（むぎわら）の一つ一つを拾うものなのだ。それからわたしと、彼と共にツイントゥスの花崗岩の岩壁にかかる昔からの大理石の階段を上って行ったとき、わたしは襲った戦慄のことなど。そこにはかつて、日の神アポロが天空をいただいて鎮座していたのだ。そして彼をめぐって、金色の雲のように、ギリシャ全土から集まった人々は輝いたのだ。そこで歓喜と感激の潮の中へ、アヒレスがステイクス川へ飛びこんだと同じように、ギリシャの青年たちは身をおどらせた。そして半神アヒレスと同じように不死身の存在となつて、そこから上ってきたのだ。その森、その神殿の中で、それら青年たちの魂は目覚め、それらはたがい共鳴して鳴りひびいたのだ。そして一人一人が、その喜びの諸音を忠実に胸

深く貯えたのだ。

しかし、なぜわたしはこんなことを語っているのだろう。まるでわたしたちにまだ古代の生きた記憶が残っているように。ああ、われわれに押しつぶさっている呪いの下では、美しい夢さえも栄えることはできないのだ。吹きすさぶ北風のように、現代はわれわれの精神の花を、おそい、蕾（つぼみ）のうちにそれを枯らしてしまふ。けれど、それにしても、ツイントゥスの山上で、わたしたちを迎えてくれたのは、黄金の一日であった。わたしたちが頂上についたのは、まだ朝の薄明のころだった。さて、昔ながらの日の神は、永遠の若やぎにあふれて昇ってきた。いつに変わらぬ満ち足りたおおらかな姿である。この不滅の巨人は、数知れぬ喜びをとまなびて見るうちに空高く翔け昇り、ほほえみながら荒れ果てたおのが国土、おのが神殿、その円柱を見おろした。それは子供が通りすがりになんかの考えもなしに草叢（くさむす）からむしって地に撒きちらしたばらの枯れた花びらのように、運命が彼、太陽神の前へ投げ棄てたものであった。

「この太陽のようであれ」と、アダマスはわたしにむかって言った。そしてわたしの手をとって、それを太陽神のほうにさし向けた。するとわたしは、朝風に運ばれて、この聖なる存在のあとについて天翔けるような気がした。その神は、いま天の頂点に、親しみ深く雄大に輝いて、世界とわれわれをその靈妙な力と精氣とで充たしているのであった。

そのときアダマスがわたしに言った一語一語を思うたびに、わたしの心は、いまなお悲しみと喜びにおどる。そしてそのころの彼の気持ちに相違ないものがわたしを訪れるたびに、わたしはわたしの乏しさを忘れるのだ。人間がこうして自分自身の世界をもっているならば、損失などというものがあるだろうか。われわれの内部にいつさがあるのだ。そのとき一本の髪の毛が落ちたからといって、なんの憂えることがあろう。神にさななりうるであらう人間が、どうして奴隷になろうとしてもがくことがあろう。

「きみは孤独の身になるだろう。愛する友よ。」
そのときアダマスはそうも言った。「きみは、兄弟たちに置きざりにされて、きびしい季節のうちにはひとり残った鶴のようになるだろう。みんなは遠くの国に春をさがしているというのに」

友よ。ほんとうにそうなのだ。われわれがひとりきりにはなれないということ、われわれが生きているかぎりは、われわれの内部の愛が死滅することはないということ、このことがあらゆる富があるときもわれわれを貧しくさせるのだ。わたしにアダマスを返してくれ。わたしと心の結びつきのあるすべての人を連れてきてくれ。そうすれば昔の美しい世界がわたしたちのあいだによみがえるだろう、わたしたちは集いあい、わたしたちの神なる自然の腕に抱かれて結びあうだろう。そうすれば、わたしには窮乏などなくなるのだ。

けれども、われわれの別れたのは運命のせいなのだ、言つてはならない。すべては、われわれ自身から来ているのだ。われわれはみずから進んで、未知の国の夜、つめたい別世界の地へと突進し、できるならば月の領域を飛び過ぎて、惑星のあなたへも殺到しようとしているのだ。そして日光が植物を育てておきながら、それをまた枯らしてしまふように、人間はおのが胸に咲いたやさしい花、親和と愛の喜びを殺してしまふのだ。

こういふと、アダマスがわたしのもとを去つたことにわたしは怒っているように聞こえるかもしれない。しかしわたしは怒つてなどいない。ああ、彼がふたたび帰つて来てくれたなら。

アジアの奥深くに、たぐいまれな優秀さに恵まれた民族がかくれているという。そこへ希望が彼を駆り立てたのだ。

ニオスまでわたしは彼について行つた。つらい数日だった。わたしは苦痛に堪えることは学んできた。しかしこのような別離に堪える力は、わたしはまったくもたなかった。

最後の時が近づいてくる一瞬ごとに、この人物がどんなにわたしの存在に織りこまれていたかが、いよいよはつきりとわかつてきた。瀕死の者が、逃げ去つてゆく呼吸を離すまいとするように、わたしの魂は彼を捉えて離さなかった。ホメールの墓のほとりで、わたしたちはなお数日をすごした。そしてニオスはわたしにとつて多くの島のうちのもっとも神聖な島となった。

ついにわたしたちは、意を決して別れた。わたしの心は苦しい戦いに疲れはてていた。それだけにわたしは、最後の瞬間には、わりあいにおちついてた。わたしは彼の前にひざまずいて、これを最後にこの腕で彼を抱きしめた。

「わたしに祝福を。父よ」と、わたしは彼を見あげてささやいた。彼は偉大なおももちで、ほへえんだ。そして彼の額は、朝空の星の前にしてひろがり、彼の眼は、天の深みをつらぬいた。「わがためにこの人を護りたまえ」と彼は声高く言った。「よりよき時代の霊たちよ。そしておんみらの不死の境へこの人を引き上げたまえ。そしておんみら、天と地のすべてのよき力よ、この人と共にあらんことを」

「わたしたちの心にはある神がやどっている」と、彼はおちついた声音にもどつて、言い添えた。「その神は、運命を、水の流れのように導き、支配する。そして万物はその神の領域のなかにある。その神がとくにきみと共にあらんことを」

こうしてわたしたちは別れた。ご機嫌よう、ベラルミン。

ヒュペーリオンからベラルミンへ

どこへわたしは自分というものから逃げて行くことができよう、もしわたしがわたしの幼いころの楽しい日々をもっていなかったら。

冥府の川の岸に迷う亡霊のように、わたしは

わたしの生の荒涼とした地帯へ帰ってきた。万物は老いては、また若返る。なぜに、われわれは自然のこの美しい循環の例外となつてゐるのだらう。それともその法則はわたしたちにも行なわれてゐるのだらうか。

わたしはそれを信じたい。もしもわたしたちの心内にひとつのものがなければ。エトナの火山のように、わたしたちの存在の奥底から噴き出してくるあの巨大な努力の精神、みずからいっさいであらうとする意欲がないならば。

しかし、自分は鞭に打たれ、くびきに掛けられるために生まれてきたのだと自認するよりは、自分の内部に煮えたぎる油のようなものを感じてゐることを、喜びとしないものがあるだらうか。荒れ狂う軍馬と耳を垂れてゐる驚馬とは、どちらがより貴いか。

友よ、そのころは、わたしの胸も偉大な希望にはらみ、不滅を目ざす喜びが、このあらゆる脈管のうちにも鼓動し、壮麗な企図を抱いてさながら広大な森林を行く思いがし、大洋にすむ魚のように幸福に、果てしない未来を望んで、遠く、さらに遠く突き進んだ時代であつた。

至福の自然よ。どんなに勇氣に充ちてこの若者はおんみの揺籃から躍り出たことだらう。新しい甲冑を着たその喜び！ その弓は張られ、その矢は箭に鳴った。そして不滅な古代の高貴な霊たちが彼を先導した。あのアダマスはそれらの霊のただなかにいたのだ。

わたしがどこへ行こうと、それらの壮麗な形

姿はわたしについて来た。焰のように、わたしの心内では、あらゆる時代の功業が燃え立つて結びあつた。そして巨人のような雲の群れが合体して、一つの歓呼する雷雨となるように、わたしの内部ではオリンピックの百千の優勝が結んで、一つの無限の勝利となつた。

わたしのように、自信と力とを獲得すべき場をもたない者は、古代の驚くべき偉容に打たれるとき、どうしてそれに堪ええようか。颯風におそわれた若木のように、吹きちぎられないでいられようか。

ああ、古代の人々の偉大さは、嵐のように、わたしの項を圧し上げた。それはわたしの顔から花の赤みをうばい取った。そして幾度かわたしは人目のないときに限りない涙にくれた。それは吹き倒された樅の樹が小川のほとりによこたわつて、その枯れゆく梢を水にひたしてゐるようだった。ああ、偉人の生命の一瞬でもいい、それを血で買えるものなら、わたしはどんなに喜んで、それを買ひ受けたことだらう。

しかし、それもなんの役に立とう。わたしを求める人は、どこにもいないのだ。

ああ、このように打ち砕かれた自分を見ることは、無残である。そのことがわからぬ人は、それについて訊ねることはやめたほうがいい。そして自分が自然によつて蝶々のように世の樂しみを受けるために創られたことを感謝し、一生涯、悲しみや不幸について語らぬがいい。

わたしはわたしの英雄たちを慕つた、蠅が光

を慕うように。危険と知りながらそのそばに近づき、逃げてはまた近づいた。

傷ついて血を流してゐる鹿が流れに飛び入るように、わたしは幾度か、悅樂の渦巻きの中へと身を躍らせた。燃える胸をひやし、榮譽と偉大さを求める兇暴壯麗な夢を洗い落とすために。しかし、それもなんの役に立つたらう。

そして、幾度か真夜中に熱い胸に駆られて、庭の露にぬれた木立ちの下に立ち、泉の子守り歌と快い微風と月影に心を和らげられ、頭上にかすかにひびいてくる潮騒の音を聞いたとき、わたしの胸の中の愛から生まれたさまたまの偉大な幻は、なんとむつまじくわたしの胸とたわむれたことだらう。

「では、天上の人々よ」とわたしは、朝の光が頭上にかすかに調べを奏ではじめたとき、心のうちで言った。「光輝ある古代の人たちよ、ではご機嫌よう。わたしはあなたがたについて行こう。わが世紀がわたしに与えたものを振り落とし、より自由な冥暗の国へ旅立とう」

けれど、わたしは鎖を断ち切ることができなくて、やつれ、わたしの饑渴に施されるみすほらしい皿を、にがい喜びをもつて、つかみとるのだった。

ヒュペーリオンからペラルミンへ

アダマスが去つてから、わたしの島はわたし

には狭苦しくなってきた。わたしはもう多年テ
イーナで退屈していた。わたしは世界へ出てい
きたいと思った。

「まずスミルナへ行くがよい」と父は言った。

「そこで航海と戦いの術を学び、開化した諸民
族の言語、その制度、思想、風俗、習慣を学ぶ
がよい。すべてのものを吟味し、最善のものを
選び取れ。——それから先は、思うままに進む
ことだ」

「それから忍耐することも少しは学ぶように」
と母はつけ加えた。わたしは感謝してその言葉
を受けた。

幼時の柵を越えて第一歩を踏み出すことは、
心を魅する喜びである。テイーナからの旅立ち
を思い出すと、誕生日を思い出すような気がす
る。頭上には新しい太陽がかがやいた。陸と海
と風を、わたしは初めてのように楽しんだ。

このスミルナでのわたしの修業のいきいきし
たいそしみ、そして急速な進歩は、わたしの胸
を少なからず慰めた。またこの時代のさまざま
な楽しい憩いの夕べのことも思い出される。幾
度わたしはメレス河畔のわがホームル誕生の地
の常緑木の林のなかを歩み、供養の花を摘んで
は、その聖なる流れに投げ入れたことだろう。
それから程近い洞窟に、わたしはやさしい夢想
と共に近づいた。伝説によればここで古人はあ
の『イリアード』を詠じたのだという。はたし
てわたしはホームルを見いだした。彼を目のあ
たりにして、わたしの声はすべて黙してしまっ

た。わたしは彼の神のような詩篇を開いた。と
それはまるで初めて読む本のもようであった。そ
れほどにそれはいまわたしの内部で、まったく
新しい生命を獲得したのだ。

またスミルナ近辺の地を歩きまわったことも
たのしく思い出される。そこはうるわしい地だ。
その後わたしは、一年に一度は小アジアへ飛ん
で行きたいと、幾度この身に翼のあることを願
っただろう。

サルデスの平原から、わたしはツモールスの
岩壁の間の谷を登った。

山麓のこちよい小屋に一夜をすごした。ミ
ルテの木蔭、ラーダンの叢の匂う中である。砂
金を生み出すバクトルスの流れには白鳥の群れ
がわたしのそばを泳いでいた。女神ツイベール
の古い神殿は、楡の木立ちの中から内気な亡霊
のように現われて、明るい月光を仰いでいた。
五本のうつくしい円柱が廢墟を悲しみ、壮麗な
大玄関がその足もとに崩れていった。

百千の花咲く茂みを縫って、わたしの道は上
へと伸びた。懸崖からは、ささやく樹々が身を
かたむけ、やさしい花吹雪をわたしの頭上にあ
びせかけた。朝早くわたしは発ったので、真昼
には頂上に着いていた。そこに立つて、眺めを
たのしみ、清らかな大氣を思うささ吸った。そ
れは至高の時間であった。

下界は海のように、若々しく、澗刺とした喜
びにあふれて、眼の前にひろがっていた。この
世ならぬ無限の光の交錯で春はわたしに挨拶し

た。そして空を行く太陽が、大地の返す無限の
光の変化によって自己を知るように、わたしの
精神は八方から襲ってくる生命のみなざりにつ
つまれて、自己を認識した。

左手には、奔流が、わたしの頭上に懸かる大
理石の巖から、巨人のように森を目がけて歓呼
の声と共に流れ落ちていた。その巖の上には驚
が雛たちとたわむれ、雪をいだいたその頂は
青空にそばだつて輝いていた。右手には雷雲が、
ジビルスの森をおおうてこちらへ進んできた。

わたしはその雲がはらんでいる嵐の危険を感じ
なかった。ただ頭髮を吹く快い風を感じただけ
である。しかし、その雷鳴を未来の声を聞くよ
うに聞いた。そしてその稲妻を、わたしの待望
する神性からの光のように見た。わたしは南に
向かって歩を進めた。そこには樂園のような国
土がその全貌を見せていた。カイステル河がそ
れを貫き、うねり流れるその姿のおもしろさは、
まわりの風景の豊かさと同じさの中を急いで過
ぎてしまふのに堪えないような風情だった。春
の微風のようにわたしの心は、幸福におぼれ、
あふれる美の中をたどった。遙かに麓に見え
る名も知らぬ平和な村、さてはメソギス山脈が
しだいにかならずで消えてゆくかなたの空へま
だ。わたしは、饗宴に酔った者のように、スミ
ルナに帰った。胸はあまりにも喜びにあふれ、そ
の充盈を世の人にも分けずにはいられなかった。
自然の美をあまりにもゆたかに心の中に取り入
れたので、人生の欠陥はそれで填めることがで

きたのだ。みすばらしいスミルナも、わたしの感激にいろいろだられて、花嫁のように見えてきた。社交の集いがわたしを惹きつけ、人々の習俗のおろかさ、子供のたわむれのようにわたしを興じさせた。生来わたしはすべての外面的な形式や習慣には心を捉えられなかったのだ、わたしはそれらのすべてとたわむれ、謝肉祭の衣裳のように、それらを着ては、また脱いだのだ。しかしながら、日常の社交という陳腐な食物の香辛料となつたのは、美しい容貌や容姿であつた。それは今でも恵み深い自然が、われわれの暗夜の中に、星のようにあちこちに輝かしてくるものなのだ。

どんなにわたしはそれらを見ることを、心からの喜びとしたことだろう。どんなに敬虔に、これらの親しみ深い象形文字を解釈しようとしたことだろう。けれど、それは、かつて春の白樺から受けた経験と、ほとんど同じであつた。わたしは白樺の樹液の効用について聞いたことがあつた。それでこの美しい幹がどんなに貴重な飲料をあたえるだろうかと奇蹟を想像した。しかし、その液には力と精氣とが十分に含まれてはいなかった。

ああ、わたしが見聞きしたそのほかのことは、すべてなんと救いたいものであつたらう。

町の教養ある人々のあいだに立ち交つていると、ときどき、人間の性質が禽獣の国の種々相に分解してしまつたのかと思われることがあつた。どこでもそうであるが、ここでも男はとく

にじだらくで、腐つていた。

音楽を聞くとか吠える動物がある。ところでこの教養ある人士たちは、精神の美しさや心情の力が話に上ると、笑うのである。火打ち石で火花を散らすと、狼は逃げる。これらの人士は、理性の火花を見ると、盗人のように顔をそむける。

わたしがあるとき古代ギリシャについて熱心に語つたとき、彼らはあくびした。そしてわれわれはなんといつてもこの現代において生きていかなければならないのだと言つた。善良な趣味はこんにちにもなお失われてはいないと、重々しく抗言した者もいた。

この言葉はやがて実証された。ある者は水夫のように駄じやれを言つた。ある者は頬を息でふくらませて、きまり文句を並べて説教した。

またある者は、いかにも悟性に富んでいるような面持ちを見せ、天に向かって指を一つ鳴らしてから、叫んだ。屋根の上の鳥を自分は問題にしない、手の中の鳥が大事である。しかし、死の話が出ると、この男はただちに殊勝げに両手を合わした。そしてしだいに談話を、僧侶たちの勢力が無にひとしいことがいかに危険であるかに、向けてゆくのであつた。

わたしがときどき利用した唯一の人間タイプは、語り手たちであつた。つまり外国の都市や国々についての生きた字引である。それは物言のぞきからくりであつて、馬を駆る主権者や教会の塔や市場を見せてくれた。

しかし、ついにわたしは、自分の身を落として荒野にぶどうを、氷原に花をさがすことに、飽きてきた。

いまわたしは断乎としてひとりで暮らした。幼い時のやさしい心は、ほとんどわたしの胸から消えていた。いやしがたい世紀の病気が、さまたまの事柄（そのすべてをわたしは語りつくすことはできない）から、わたしにはつきりと見えてきた。そしてひとりの魂のうちにわたしの世界を見いだし、ひとりの親しみ深い形姿を通じてわが種族を抱擁しうる美しい慰めも、わたしには欠けていた。

友よ、希望のない生活とはなんであろう。炭火から飛び跳ねてすぐに消える火花、一瞬間が聞こえるがすぐに鳴りやむ冬の突風、それがつまりわれわれのすがたではないか。

燕も冬にはあたたかい土地をさがす。野獣も夏の暑さには走り回つて、泉をたずねる。乳児はだれからも教えられはしないが、母が乳房をこばまぬことを知つていて、いつもそれを求めるのだ。

希望がなくては、何ものも生きることではない。わたしの心はいまおのが宝を深くかくした。しかし、それはただよりよい時代のためにそれを貯えておくうとしてであつた。わたしの渇いた魂が、いつかはかならず逢いうるであろう唯一のもの、神聖なもの、誠実なもののため。

それは、予感に恵まれたときには、月影のよ